

## 文献紹介

「苦悩の慣用表現（イディオム）：精神社会的苦悩の表現における選択肢，南インドの事例研究」

どの社会でも，人々が自らの内面的な苦悩を表現する手段と型式は，彼らの文化に基づいて構成されており，これに関連した特有な社会行動が見られる。

西南インドの農村におけるハヴィク・ブラーフマン (Havik Brahmin) の女性社会を例にとると，彼女らの苦悩の文化的表現様式を，①食事に関わるもの，②清浄 (purity) との関連，③アユルヴェーダ医によるもの，④邪視 (evil eye) と憑霊 (spirit possession)，⑤宗教的献身 (religious devotion) が主なものである。

食事の関連では，家族や親族に対する食事のサービスの異常，食欲不振や拒食，過食による肥満，毒の混入に対する疑い，等が感情や精神状態の指標として取り沙汰される。

清浄と穢れは，カースト秩序の基礎となる正常な生活の遵守・逸脱と結びつけられるため，不安や葛藤を表現するイディオムとして関心をひく。

生理的な不調や，目まい，虚脱感等の症状は，アユルヴェーダの専門医によって，体液の異常 (humoral upset) や冷熱のアンバランスといった理論を介して全人格的問題として受けとめられるため，自らの社会的不安や悩みを周囲に訴える上で有効となる。

邪視は，慾望を達成できない者が，精神的に脆弱な状態の者に対して行使すると考えられており，従って，邪視の疑惑を取り沙汰することは，両者にとっ

てこうした状態を表現する上で有効なイディオムとなる。また憑霊も、精神的不安の状態を憑依霊の仕業に帰することにおいて、直接的な表現形式となっている。

宗教的な儀礼、巡礼、聖歌斉唱、カルトへの参加等は、感情の表現手段であるばかりでなく、自らの社会的地位や感情を高めたり、日常生活から離れる正当な理由も提供する。またカルトへの参加は、神聖な理由に基づいてそれ以外の手段では得られない新しい社会関係の拡大と心理的なサポートが得られる機会であり、治癒の側面をも有する。

このように、多くの表現形式が社会文化の全体的な脈絡の中で並存しており、したがって現実の状況における具体的な個人の行動の分析を通して、いかなる場合にいかなる条件のもとでどのような表現手段が採られるか、その有効性と周囲の人々の反応等を、全体的な脈絡のもとで捉える必要がある。

表現の文化的イディオムとしての症状を、特定の原因との病理学的、還元主義的な因果論によって捉えるのは危険であり、むしろイディオムが内包する多次元的な (multidimensional) 性格に注目すべきである。また多様な表現様式の並存と、それに対応した多様な治癒体系の並存は、個人の行動に文化的には認められた選択肢を提供するという点で適応的な機能を有し、またそれ自体、社会的救済システムの重要な本質である。

Nichter, Mark : *Idiom of Distress ; Alternatives in the Expression of Psychosocial Distress, A Case Study from South India, Culture, Medicine and Psychiatry*, 1981, vol 5.

### 「薬物の使用と濫用：その通文化的展望」

意識状態を変えるための薬物使用 (drug use) は、非西欧伝統社会においては文化的に様式化され制度化されているのに対して、アメリカ合衆国をはじめとする現代産業社会の若い世代における薬物の使用は、“濫用” (abuse) とし

て社会問題視され、大きな論争をまき起こしている。両者の間の、有用と濫用の区別をめぐる論議や、相互関連を明らかにする上で、通文化的な研究が必要である。

自民族中心的な価値を負いがちである濫用という概念を検討しながら、アメリカ社会での薬物の使用を見ると、社会に対して破壊的な側面と同時に、当の集団や個人にとっては有益な適応の機能も有することがわかる。

伝統社会における幻覚性植物の摂取と比較してみると、社会の階層化・分節化が進むに伴い、幻覚植物の使用は、エリート集団の管理下におかれるようになる。階層や国家の秩序にとって、こうした薬物使用による信仰は破壊的な危険なものと思なされる。一方、より伝統的な社会においては、薬物は逃避や反抗として濫用されることなく、文化的価値を実現する肯定的な目的に用いられ、その使用は法によるのではなく宗教儀礼によって制御されている。

これに比べると、1965～75年の10年間に急増した薬物使用は、初期の説明では、好奇心、権威に対する反抗、耐えがたい状況からの逃避といった否定的な見地からなされていた。しかし、スレイター（Slater）が提示したように、若い世代の求める新しい生活様式と文化を想定するならば、その文化的価値を実現する儀礼的な機会での薬物使用は、彼らの人生経験にとって適応的な側面を持つことがわかる。

薬物の有用・濫用の評価の違いは、文化社会的なコンテキストの差によるものにすぎない。アメリカの若者の間での儀礼的な薬物使用のどのようなパターンが当の集団や個人にとってどのように有益であるのかという点の調査が望まれる。

De Rios, M.D. and Smith, D.E : Drug Use and Abuse in Cross Cultural Perspective, *Human Organization*, 1977, Vol 36. No 1.

（伊藤亜人／東京大学教養学部助教授）